

ラー姆過激派の越境移動がイスラーム過激派としての論理、およびテロリズムを採用とした運動の特質により、イスラーム過激派の存在と不可分な行動であるという点を明らかにした上で、一般的な越境移動との共通性として、受け入れの場となる諸国の状況や出入国管理政策との関連、勧誘から受入れに至る過程での人的なつながりの重要性といった点を明らかにしている。そのような知見から、イスラーム過激派の越境移動への対策のためには、イスラーム過激派の越境移動のメカニズム全体に着目し、各々のアクターの性質や彼らの活動が活性化する環境を理解することが肝要であるとの示唆を提示している。

第9章「政治と経済——経済戦略から見るイラク・クルディスタンの独立問題」(吉岡明子)は、イラク・クルディスタンの独立問題を主題とする。本章は、この問いに関する先行研究が専ら、イラク・クルディスタンが事実上の国家として自立度を高めていく政治的な過程から論じられているという点を指摘する。その上で、イラク・クルディスタンの将来の独立を左右するもう一つの問題として、経済戦略の維持可能性や問題点を解明する必要性を提示する。この立場から歴史的経緯を辿ることにより、本章はイラク・クルディスタンの経済戦略の現状について、イラク国内の政治的なパワーバランス・油価といった対外環境への依存度の高さ、自治区という枠組みの脆弱性を指摘し、独立国家を目指しうる維持可能な経済構造を持つ「国家建設」が課題として残っていることを明らかにしている。

以上、簡単に各章の議論を概観してきたが、まず、いずれの章も明確な問題意識を提示し、その克服に向けたアプローチを明らかにした上で、事例分析を行うという形で、各章の構成が一貫しており、まとまりのある一冊となっているという点が本書の優れた特徴として指摘できる。こうした一貫性の担保には、各論考の著者の努力はもちろんのことであるが、編者による緊密なコミュニケーションがあったと想像される。その多大なる努力に敬意を表したい。

一方で、背景説明と実証部分のバランスの確保に苦勞している様子が伺われる論考が散見された。上記のような構成を配慮し、各章を一定の長さに揃えた上で、本格的な研究論文として内容を十分に盛り込むというのは容易ではなかったであろう。国別ではなくテーマ別での構成である以上、一元的に背景説明を設けることは難しいかもしれないが、背景説明をもう1章加えた上で、各章での背景説明の負担を減らすなど、もう少し分量バランスに工夫が見られると、よりまとまりのある論考に仕上がったように感じられた。

序章において編者が「本巻は、他巻が基本的にそれぞれ1つの国や地域……を扱っているのに対して、言語も民族も宗教・宗派も実態を異にする4カ国を分析の対象としている」(p. 1)と述べているように、一見するとこの4ヶ国の取り合わせは無謀であるように見える。しかし、本書は、国家/非国家主体の混交、国境を越えた政治展開が随所に散りばめられており、そこに統一性が見出されるとともに、本書を魅力あるものとしている。一見バラバラに見えるこの4ヶ国を(ある種強引に)一つの「地域」にまとめたからこそ、この「地域」に通底する特殊な性質が浮き上がってくるのである。このことから本書は地域研究の面白さを再確認させてくれる一冊であるといえる。

現代において、このような特異な「地域」を取り上げる意義は極めて大きい。領域国民国家体制の問い直しの必要性は以前から叫ばれていたものの、近年では、米国トランプ前大統領の「アメリカ・ファースト」のように、国家をより狭く、排他的な領域として捉えようとする言説が力を持ち、国民国家を「固定化」する力学が以前にもまして強まっているためである。こういった状況の中で、改めて国家や地域という領域を問い直す視座の重要性は高まっており、このことも本書にいっそうの価値を与えているといえるだろう。

(渡邊 駿 日本エネルギー経済研究所中東研究センター 専門研究員)

---

Sherali Tareen. 2020. *Defending Muhammad in Modernity*. Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press. xxii+482 pp.

南アジアでは19世紀以降、デーオバンド派(Deobandī)やバレールヴィー派(Barelvi)といったスンナ派ウラマーの派閥が形成され、インド・パキスタン分離独立を経て現在に至るまで政治や宗教界に大きな影響を有し続けている。デーオバンド派、バレールヴィー派双方とも北インドの現ウッタール・プラデーシュ州に位置する町の名前に由来し、どちらもハナフィー学派を信奉しているものの、19世紀前半のイスラーム神学論争を発端に両派は今日に至るまで対立し続けている。

本書はSherali Tareen氏が2012年にアメリカのデューク大学に提出した博士論文をもとにしており、19世紀前半に起こったイスラーム神学論争とデーオバンド派とバレールヴィー派の思想的対立がテーマである。2020年4月にAmerican Institute of Pakistan Studies 2020 Book Prizeを受賞している。

まず初めにSherali Tareen氏の略歴について簡単に紹介したい。氏は中等教育までパキスタンのクエッタ、高等教育をアメリカで受けたパキスタン人である。彼自身マドラサ教育は受けておらず、デーオバンド学院やパキスタンのイスラーム思想家であるサイイド・アブル・アラー・マウドゥーディー(Saiyid Abū al-A'lā Maudūdī, 1903–1979)をアメリカの大学にて初めて知ったというエピソードが本書の後書きで記されている(p.385)。現在はFranklin & Marshall Collegeの准教授を勤めているほか、イスラーム研究の新刊書をその著者へのインタビューを交えて紹介するポッドキャスト配信New Books Network: Islamic Studiesの共同ホストも務めている。

本書は三部12章構成で、本書の主題はムガル朝衰退による政治的主権の喪失により、神の主権とその共同体の日常生活との相互作用をめぐる議論がどのように発生したのかを明らかにすることである(p.5)。第一部ではシャー・ムハンマド・イスマエール(Shāh Muḥammad Ismā'īl, 1779–1831)とファズル・ハック・ハイラーバーディー(Faḥl Ḥaqq Khairābādī, 1797–1861)間、第二部ではデーオバンド派のアシュラフ・アリー・ターナヴィー(Ashraf 'Alī Thānavī, 1863–1943)とバレールヴィー派のアフマド・リザー・ハーン(Aḥmad Rizā Khān, 1856–1921)間の神の主権、預言者の権威、聖者廟等における信仰実践に関連した論争に着目し、これらの論争を「競合する政治神学」として位置づけた上で(p.4)、デーオバンド派とバレールヴィー派の思想的対立がシャリーア対スーフイズムの二項対立として認識されることに異議を唱え(pp.15–17)、改革主義者対伝統主義者、過激派對穏健派、正統派對異端派といったイスラーム内の二項対立の境界を、学者たちがどのように権威的、敵対的な言説を形成したのかについて検証している(p.27)。

以下、日本ではあまり知られていないシャー・ムハンマド・イスマエールとファズル・ハック・ハイラーバーディーの生涯について簡単に紹介したい。

シャー・ムハンマド・イスマエールは南アジア最大の思想家であるシャー・ワリーウッラー(Shāh Walī Allāh Dihlavī, 1703–1762)の孫にあたる。彼はワリーウッラーが開校したデリーのラヒーミーヤ学院で、伯父のシャー・アブドゥルアズィーズ(Shāh 'Abd al-'Azīz Dihlavī, 1746–1824)のもとイスラーム諸学を学んだ。サイイド・アフマド・バレールヴィー(Saiyid Aḥmad Barelvi, 1786–1831)との出会いをきっかけに、1819年からイスラーム改革思想を大衆に普及させる活動を開始、1826年にはペシャワール近郊で当時パンジャブを支配していたシク王国に対して武装ジハードを展開したが、1831年にバーラーコート(Bālākot)で殉教した。サイイド・アフマド・バレールヴィーとバレールヴィー派はニスバが同じであるため混同されやすいが、後者は前者を敵視している関係であり、注意が必要である。

ファズル・ハック・ハイラーバーディーは1857年のインド大反乱を指導したイスラーム学者として有名である。彼はラクナウでイスラーム諸学を修めたのち、デリーのラヒーミーヤ学院でシャー・アブドゥルアズィーズの許でハディース学を修めた。1820年代以降、イギリス東インド会社のムフティーを務めていた。またアラビア文学の素養もあり、ウルドゥー文学の巨匠ガーリブ(Ghālib, 1797–1869)とも親交が深かった。

第一部ではムガル朝からイギリスに政治的権力が移行する中で、神の主権と預言者の正統性の関係について、イスマエールとハイラーバーディーの間でどのような議論が行われていたかに主眼が置かれている。彼らの論争のテーマは預言者ムハンマドによる救いのとりなし(shafā'at)、神が嘘をつく能力を有するの否か(imkān-i kizb)について、そして預言者ムハンマドと同等の存在を神は作り出すことができるのか(imkān-i naẓīr)の三点である。第5章で取り上げられているとりなしの議論では、イスマエールは預言者が罪人のためにとりなす能力は限られており、もし預言者がより高いとりなす能力を持っていたならば、神の主権を損なうことになり、また人々の間に異端をもたらすと主張した。一方で、ハイラーバーディーは

これを預言者への侮辱とみなした。この論争の発端になったイスマール派の著者『信仰の強化 (*Taqviyat al-Imān*)』では、彼が生きていた当時、神の主権に対抗する競合者(具体的にはスフィーア聖者)が公共の場ではびこっており、大衆やエリート層を含めたインドのムスリムの大部分は多神崇拝と不信仰に陥っていると見なした (p. 87)。ハイラーバーディーは「神の主権の擁護の名のもとで、イスマール派が預言者ムハンマドの品位を落とす新たな伝統をでっちあげて」おり (p. 138)、「預言者や聖者、天使を侮辱しているイスマール派は死に値する不信仰者である」と非難した (p. 140)。

第二部ではデーオバンド派とバレルヴィー派の思想的対立を彼らの著作から検討を行っている。第6章ではしばしば現代南アジア・イスラームにおいてウラマーの派閥を指し示すマスラク (*maslak*) と呼ばれる用語の定義を行っている。アラビア語の *sulūk* (適切な応対) から派生したマスラクは、「変化しやすく、曖昧で多変数なカテゴリー」であり、美德や倫理と関連しているとしながらも、南アジアの文脈において規範性をめぐる競争の暗黙の目印として、その派閥間の対立と密接に絡んでいる概念である (p. 173)。

第7章と第8章ではアシュラフ・アリー・ターナヴィーをはじめとするデーオバンド派学者のビドア (*bid'a*) や預言者ムハンマドの生誕祭に関する見解を取り上げ、彼らがどのようにビドアの境界を想像し、ビドアに対して反論したのかを明らかにすることによって、デーオバンド派の改革思想における主要な要素を解明している。

第9章と第10章ではバレルヴィー派のアフマド・リザー・ハーンによるデーオバンド派批判に焦点をあてている。彼はデーオバンド派がビドアに立ち向かうという名目で、長年行われてきた儀式や敬虔な慣習を不当に攻撃していると考えていた一方で、デーオバンド派同様に、あるいはそれ以上に大衆や女性の慣習を非難していたことを明らかにしている。第11章では隠された知 (*'ilm al-ghaib*) に関する両者の見解について緻密に検討を行っている。

第三部第12章ではデーオバンド派とハージー・イムダードゥッラー・ムハージル・マッキー (*Hājī Imdādullāh Muhājir Makkī, 1817–1899*) の関係性を取り上げている。イムダードゥッラーはアシュラフ・アリー・ターナヴィーをはじめとするデーオバンド派を形成した学者たちに影響を与えたチシュティー派のスフィーアで、同派がスフィーズムを全否定していないことの左証として取り上げられることが多い。しかし、*Tareen* はここでターナヴィーを始め、デーオバンド派の学者がイムダードゥッラーの見解をすべて受け入れているわけではないことを明らかにしている。

本書はデーオバンド派及びバレルヴィー派研究において、新たな視点を提供した記念碑的研究書であるといえる。特にデーオバンド派とバレルヴィー派間の論争をイスマール派とハイラーバーディーの論争から位置づけて説明しようとする試みは評者の知る限り皆無である。またハイラーバーディーによる「預言者ムハンマドを冒瀆する者は死刑」という主張はバレルヴィー派に受け継がれ、現代パキスタンにおけるバレルヴィー派系列の宗教政党ラッバイク運動 (*Tahrīk-e Labbaik Pākistān, TLP*) が熱烈に冒瀆法維持を主張する根拠として見なすこともできるだろう。

ただし本書には問題点がないわけではない。先行研究ではウルドゥー語をはじめ、アラビア語やペルシア語の資料は十二分に使用している。しかし、他の評者も指摘していることだが [*Gugler 2020*]、欧米の研究については不足しているように見受けられる。*Gugler* は「隠された参照リスト」(*'hidden' list of references*) と表現しているが [*Gugler 2020: 360*]、特に評者はこのリストの中に [*Rizvi 1982*] を加えたい。*Rizvi* のこの著作はシャー・ワリーウッラーの息子のシャー・アブドゥルアズィーズを取り上げた大著であるが、第7章でイスマール派とハイラーバーディー間の、預言者ムハンマドによる救いのとりなし、神が嘘をつく能力を有するの可否か、預言者ムハンマドと同等の存在を神は作り出すことができるのかについての論争が取り上げられている [*Rizvi 1982: 497–522*]。もし本書を参照できていれば、デーオバンド派とバレルヴィー派の思想的対立をシャー・ワリーウッラーからイスマール派を経てどのように変化していったのか、描けた可能性もあるだけに残念である。

またハイラーバーディーの親友であったウルドゥー・ガザルの巨匠ガーリブも、イスマール派の論争に巻き込まれている [*Russell and Islam 1969: 32–34*]。このエピソードがあれば、彼らの論争が学者だけでなく知的エリート層にも波及していたことを示せたはずである。またハイラーバーディーの生涯と著作を分析した研究書として [*Nūrānī 2013*] があり、*Qādirī* はウルドゥー語学の観点からイスマール派の『信仰の強

化』の分析を行っている [Qādirī 1988: 123–131]。

誤記として、ハイラーバーディーの没地アンダマン諸島をミャンマーと記しているが (p. 134)、同諸島の大部分は現在インド領であり、彼の墓はインド領に属している南アンダマン島ポートブレア (Port Blair) にある [Malik 2006: 79]。

以上の課題はあるものの、イスマールとハイラーバーディーの論争に関していえば、現在に至るまで続いており、イスマールの『信仰の強化』に対する批判書は 250 冊以上あるため (p. 85)、その全てを包括的にまとめるにはさらなる研究蓄積が必要である。本書を [Metcalf 1982] と [Sanyal 1996] に次ぐ、近現代南アジアのウラマー研究における必読の書としてお勧めしたい。

<参考文献>

- Gugler, Thomas K. 2020. “Book Reviews: Defending Muḥammad in Modernity,” *Islam and Christian-Muslim Relations* 31(3), pp. 359–361.
- Malik, Jamal. 2006. “Letters, Prison Sketches and Autobiographical Literature: The Case of Fadl-e Haq Khairabadi in the Andaman Penal Colony,” *The Indian Economic & Social History Review* 43(1), pp. 77–100.
- Metcalf, Barbara D. 1982. *Islamic Revival in British India: Deoband, 1860–1900*. Princeton: Princeton University Press.
- Nūrānī, Khūshtar. 2013. *‘Allāma Faḡl-i Haq Khairābādī: Cand ‘Unvānāt*. Na’ī Dihlī: Qaumī Kaunsil barā’e Farogh Urdū Zabān.
- Qādirī, Muḥammad Ayyūb. 1988. *Urdū Nasr ke Irṭiqā’ men ‘Ulamā’ kā Ḥissa: Shimālī Hind men 1857 tak*. Lāhaur: Idāra-yi Saqāfat-i Islāmīya.
- Rizvi, Saiyid Athar Abbas. 1982. *Shāh ‘Abd al-‘Azīz: Puritanism, Sectarian, Polemics and Jihād*. Canberra: Ma’rifat Publishing.
- Russell, Ralph and Khurshidul Islam (eds.). 1969. *Ghalib, 1797–1869: Life and Letters*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Sanyal, Usha. 1996. *Devotional Islam and Politics in British India: Ahmad Riza Khan Barehwi and His Movement, 1870–1920*. Delhi: Oxford University Press.

(松田 和憲 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員)

---

澤井真『イスラームのアダム——人間をめぐるイスラーム神秘主義の源流』慶應義塾大学出版会 2020年 242+33頁

本書を手取る一般読者は、おそらく「イスラームのアダム」という表題に一瞬瞠目してしまうのではなかろうか。イスラームの開祖は預言者ムハンマドであり、旧約聖書などに描かれるアダムという人物をなぜイスラームと結びつけて語る必要があるのか、と疑問に思われる方も少なくないだろう。だが、本書で明らかにされるように、原人アダムはイスラーム神秘主義思想のコンテキストのなかで重要な役割を担い続けてきた。より具体的に言えば、本書の副題で「人間をめぐるイスラーム神秘主義の源流」と表されているように、スーフィーと呼ばれる神秘思想家にとって、アダムとは、著者の言葉を借りて言えば、「神という把握不可能な超越的存在を知ろうとする彼らの前に投げかけられた手がかり」であると同時に「人間の源流にある」(43頁)存在なのである。こうしたアダムを中心に据えた神秘主義的言説を考察することで、本書はスーフィーが人間をどのように理解してきたのかを明らかにしている。したがって、本書はイスラーム神秘主義を取り巻くさまざまな問題群を知るうえでの必携の書と言えるであろう。

また本書は、井筒俊彦著作全集、井筒俊彦英文著作コレクションを世に送り出した慶應義塾大学出版会から出版されている。井筒俊彦が日本に初めてイブン・アラビーというイスラーム世界の偉大な思想家を紹介